

もり

やま

だい

どう

日本の写真史にその名を刻んだ大阪の偉大な写真家たち。その写真家が写し出した作品から、大阪の都市の様相を振り返る。第3回は森山大道の《大阪地下鉄天王寺駅》。

はたなか・あきひろ 1962年大阪生まれ。民俗学者。編集者として『月刊太陽』のほか、荒木経惟、佐内正史、石川直樹らの写真集を手がける。著書に『天災と日本人』『21世紀の民俗学』『死者の民主主義』『廃仏毀釈』『宮本常一』『関東大震災』『新・大阪学』ほか、共著に『宮本常一と写真』がある。

写真家としての出発は
大阪から

森山大道（1938）は、国際的にも高い評価を受ける、現代日本を代表する写真家のひとり。大阪府池田市に生まれるが、父親の転勤で各地を転々とし、広島、島

根、千葉、東京などで育ち、小学校5年のとき大阪に戻った。

大阪市立工芸高等学校図案科（二部）を中退し、1950年代後半からフリーの商業デザイナーとして、大阪市中央区平野町に事務所を設立。その後、大阪在住の写

真家・岩宮武二のスタジオにアシスタントとして入った。岩宮の紹介で写真家集団「VIVO」に参加するため上京したが、参加直前に解散したため、細江英公の助手となる。フリー写真家に転身後、雑誌『カメラ毎日』に発表した

『につぼん劇場』シリーズなどが評価され、日本写真批評家協会新人賞を受賞する。1968年、中平卓馬に誘われ、雑誌『Provoke（プロヴォーク）』に第2号より参加する。70年代以降は『狩人』『写真よさようなら』など傑作写真集を刊行し続けている。

上京後初めて、
故郷大阪を被写体に

森山は上京後、故郷である大阪を強いて被写体にしてこなかったが、1967年に『Daido Hysteric No.8』を刊行。2007年には前作を増補・再編集したポケットサイズ版の『大阪+』、2016年

にも決定版というべき『Osaka』を刊行している。

「若いぼくにとって、心の針はひたすら東京へと指しつづけていた。そして現在、ぼくの心の針は再びぐるりと回転し、大阪の街々へと立ち戻りつつある。それは、大阪に生れた多くの郷愁であろう。ただ、レンズの向うに映る大阪の街頭は、いまでも相変らずしたたかで、いとも簡単に多くの郷愁を裁ち切ってしまう」（森山大道「大阪+」より）。

写真の大阪市営地下鉄（現・Osaka Metro）御堂筋線天王寺駅は、1938年1号線（御堂筋線）の難波駅―天王寺駅間延伸時に開業した。以来、プラットホームの天井から吊り下がるシャンデリアは、80年以上にわたって、天王寺・あべののシンボルとして親しまれてきた。私事ながら、阿倍野区で育った筆者にとっても、郷愁をそそられる情景だ。しかし、2025年3月に天王寺駅のデザインは、シャンデリアも含めてリニューアルされたのだった。



森山大道《大阪地下鉄天王寺駅》1997／2010年 国立国際美術館蔵